

東大寺龍松院出土の劍頭文・巴文軒平瓦について

藤 元 正 太

## 目次

I. はじめに	49
II. 龍松院出土の軒平瓦について	49
III. 剣頭文軒平瓦について	49
IV. 瓦の検討	56
V. おわりに	59

## 論文要旨

剣頭文軒平瓦は、平安時代の後期から鎌倉時代にかけてみられる軒平瓦の一種である。大和地域では、薬師寺を中心とする大和盆地西部地域で確認できる一方、東大寺および興福寺では確認されてこなかった。このような状況の中、東大寺の子院の1つである龍松院の発掘調査において、剣頭文・巴文軒平瓦が2点出土した。本稿では、全国の剣頭文軒平瓦を概観することで、この剣頭文・巴文軒平瓦の位置づけおよび、東大寺から剣頭文軒平瓦が出現したことの意味について検討する。

まず、製作技法から、龍松院出土の剣頭文・巴文軒平瓦は1251～1260年頃に製作されたものとみられた。また、最も文様構成が類似した剣頭文・巴文軒平瓦は、橘寺と薬師寺で確認することができた。橘寺と東大寺の直接の関係性は薄いものの、橘寺が醍醐寺の末寺であった時期があることから、醍醐寺と東大寺の強い結びつきの中で類似する軒平瓦が使用された可能性がある。かつては、中世の大和地域で大きな影響力を保持していたのは興福寺であり、東大寺は対抗できなかったという意見もあったが、今回の発掘調査で東大寺もまた瓦生産において他の南都寺院と関係を持っていたことが明らかになった。

藤元 正太（ふじもと しょうた）

奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

## I. はじめに

剣頭文軒平瓦は、平安時代後期から鎌倉時代にかけてみられる軒平瓦の一種で、鎌倉を中心に東北地方の平泉から九州地方の大宰府までのほぼ全国で確認されている。奈良県内では、薬師寺や法隆寺を中心とした大和盆地西部地域の寺院で出土している。その一方で、東部地域の東大寺および興福寺から出土した事例はこれまで多く報告されてこなかった（佐川 1995）。

しかしながら、2020 年度に東大寺子院の龍松院で実施した発掘調査（史跡東大寺旧境内第 184 次）にて、剣頭文・巴文軒平瓦が 2 点出土した（藤元 2021）。本稿では、この 2 点の軒平瓦について、中世の軒平瓦全体における位置づけ、さらに剣頭文軒平瓦が東大寺でも確認されたことの意義について考察する。

## II. 龍松院出土の軒平瓦について

龍松院は、東大寺講堂跡から北東へ 200 m ほどの丘陵南裾に位置する。1540（天文 9）年に当該地に大喜院が開かれて以降、1762（宝暦 12）年の火事による焼失・再建を経て東大寺の子院として存在している。今回の調査では中世以前とみられる礎石建物と、中世の溝が確認された。遺構に伴う遺物は見つからなかったが、遺構面を覆う層からは多数の遺物が発見された（藤元 2021）。

剣頭文・巴文軒平瓦は、礎石建物を直接覆う遺物包含層から 2 点出土した（図 1）。瓦当文様をみると、上外区に珠文が 25 個配されている。内区では、中央と左右両端に左巻き三つ巴文が配されており、その間を下向きの剣頭文がそれぞれ 6 個施されている。表現技法は陽刻である。断面の観察から、顎貼り付け技法で製作され

たことが確認できる。また、平瓦部凸面から顎部へ移行する部分に明瞭な段がみられる。瓦当の裏面は、タテケズリの痕跡もみられるが、基本はヨコナデである。以上のように、山崎信二氏が中世の軒平瓦の特徴としてあげた製作技法（図 2）がみられる（山崎 2000）。2 点の文様および製作技法は極めて近似しており同じ工房で製作された可能性も考えられるが、范傷等が確認できないため同范関係は明らかにできなかった。同じ層からは、土師器、須恵器、瓦器が出土した。土器の特徴は、13 世紀中葉～14 世紀初頭のものと考えられる（森下・立石 1986）。

## III. 剣頭文軒平瓦について

中世瓦については、山崎信二氏がこれまでの研究史をまとめつつ、全国の瓦を集成・検討しており（山崎 2000）、中世瓦の研究における 1 つの到達点となっている（中世瓦研究会編 2019）。この章では、主にこの山崎氏の論考を参考にしながら、現時点における剣頭文軒平瓦の事例について報告したい。

### （1）大和地域における剣頭文軒平瓦について（図 3）

大和地域における剣頭文軒平瓦の出土事例は、薬師寺を中心に確認できる（奈良国立文化財研究所 1987）。平安時代末以降の時期にみられる軒平瓦としては、7 種の型式（293～299）が報告されている。このうち、293 型式は平安時代末のものと考えられ、大安寺、額安寺、法隆寺で同范品が採集されている。294～299 型式は鎌倉時代のものとみられる。陰刻技法で文様が施され、折り曲げ技法で整形されていることから、294～297 型式が中世 II 期前半（1210～1243 年）、陽刻技法かつ

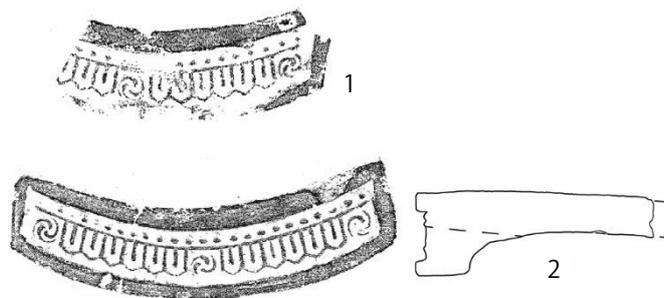
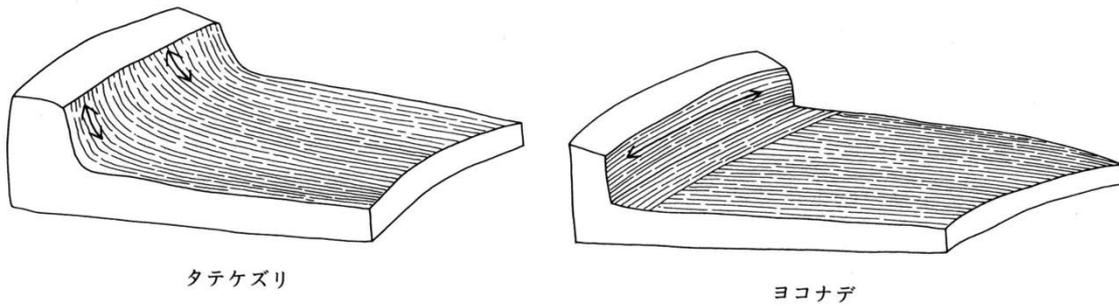
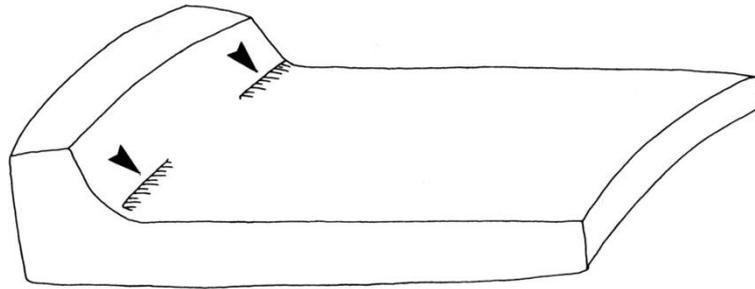


図 1 東大寺龍松院出土の剣頭文・巴文軒平瓦 (S=1/4) (藤元 2021 より転載)



顎部瓦当部裏面の調整技法

図2 軒平瓦の製作技法（山崎 2000 より転載）

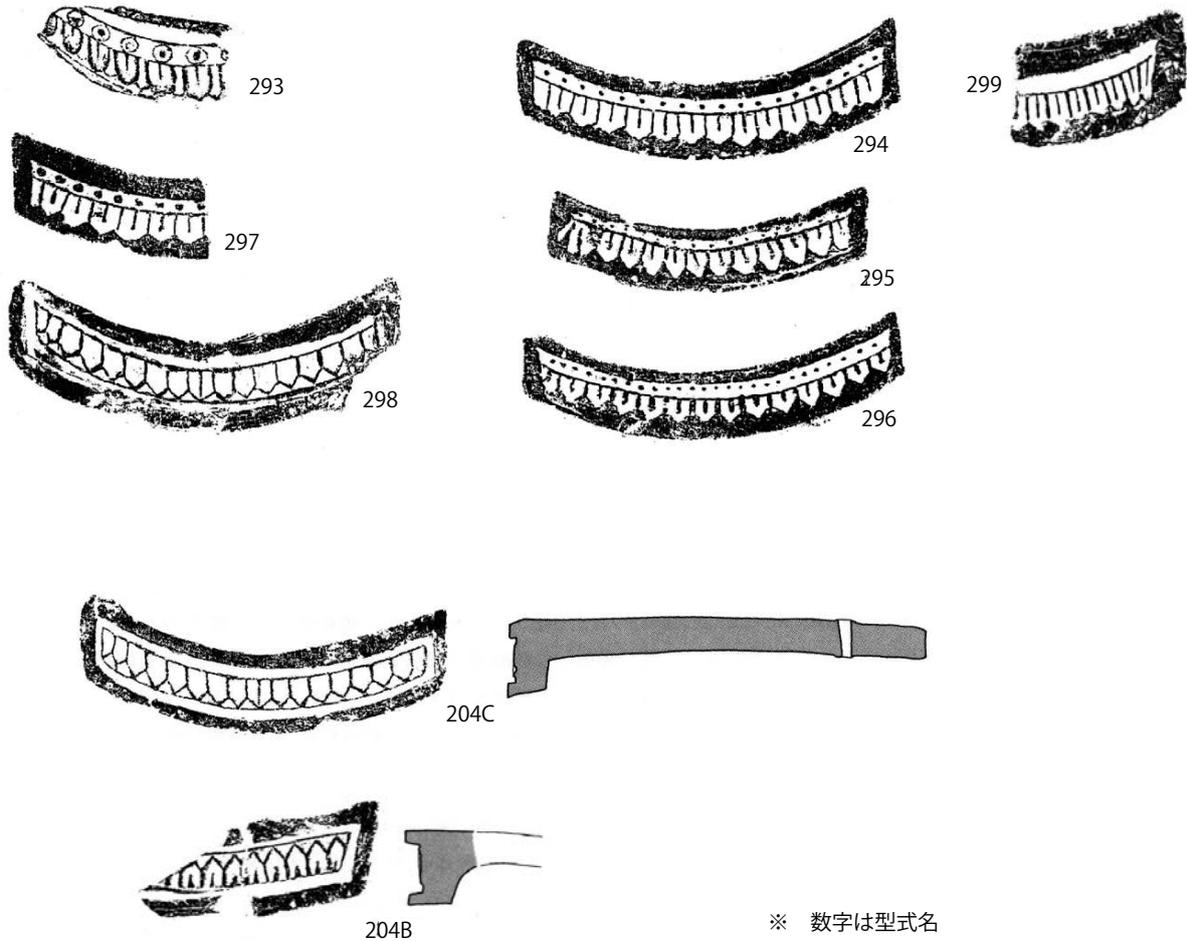
顎貼り付け技法の 298 型式がⅡ期末（1251～1260 年）と考えられる（山崎 2000）。297 型式は唐招提寺、298 型式は秋篠寺、法起寺、法隆寺、299 型式は唐招提寺、にそれぞれ同范例がある。また、294～298 型式では、平瓦部凸面から顎部へ移行する部分の両隅に台によって押圧された痕跡が共通して認められる。

法隆寺では、204 型式 C（薬師寺の 298 型式と同范）の出土例が最も多く、さらに上向きの剣頭文が施文されている 204 型式 B も数は少ないが出土している。204 型式 C の製作技法について、佐川正敏氏は鎌倉時代前期にみられる顎貼り付け技法と後期になって出現する瓦当貼り付け技法の両方がみられ、1250～1260 年代頃以降のものと考えられるとしている。その上で、1261（弘長元）年の嵯峨上皇の南都行幸に先立つ整備で使用

されたと推定している（佐川 1995）。一方、204 型式 B は法隆寺のほか、松尾寺および法起寺でも確認されている（奈良県教育委員会文化財保存課編 1955、前園・関川 1976）。

（2）他地域における剣頭文軒平瓦について

大和地域以外の畿内に目を向けてみると、京都において京都産の軒平瓦に剣頭文がみられる（図 4）。Ⅰ期（1180～1210 年）からⅡ期にかけてみられるものであり、陰刻技法で表現され、折り曲げ技法で製作されている。また、Ⅱ期末の大和産とみられる蓮華王院出土の瓦には、法隆寺および薬師寺と同范である陽刻技法の剣頭文軒平瓦がみられる。断面からは顎貼り付け技法と考えられる。和泉地域または京都で出土した和泉産の軒平瓦



薬師寺：奈良国立文化財研究所 1987 より転載 法隆寺：山崎 2000 より転載  
 図3 大和地域出土の剣頭文軒平瓦 (S=1/5) (上7点：薬師寺、下2点：法隆寺)

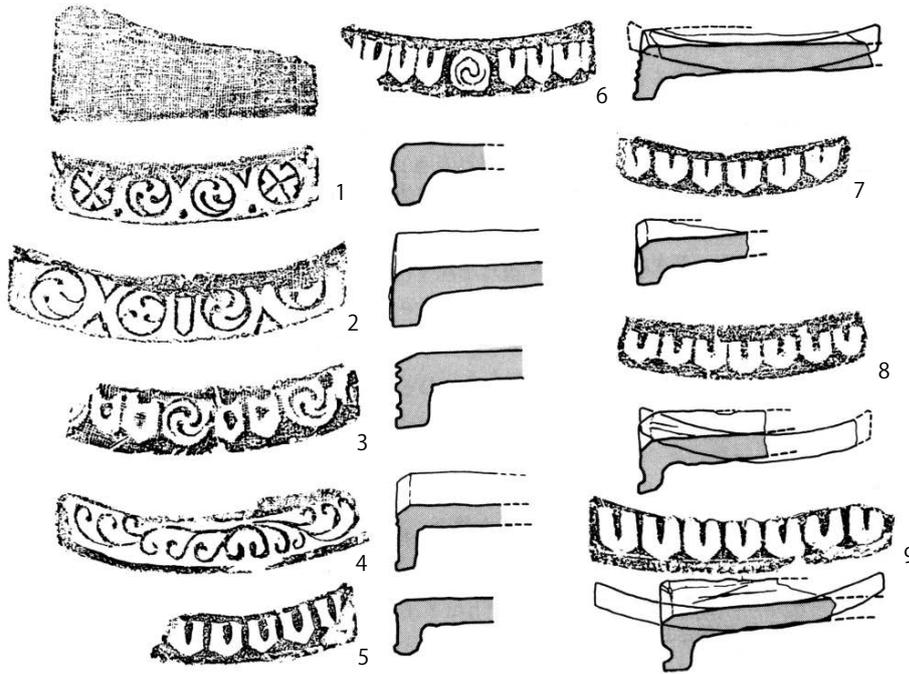
には、剣頭文が確認できない(山崎 2000)。河内地域では、京都産と考えられる剣頭文軒平瓦が宮町遺跡、倉治廃安養寺で確認されている。

関東地方に目を向けてみると、鎌倉は日本で最も剣頭文軒瓦が確認できる地域である(図5)。I期においては、主に鶴岡八幡宮で確認されている。この時期の剣頭文は、総じて陰刻技法によって施文され、折り曲げ技法および顎貼り付け技法によって製作されている。II期後半(1243～1260年)以降になると永福寺、建長寺、称名寺で確認される。下向き剣頭文で表現技法が陽刻に変化し、顎貼り付け技法または折り曲げ技法で製作されている。III期(1260～1300年)になると、鎌倉極楽寺、永福寺、称名寺などでみられる。剣頭文の向きが上向きのもので出現し、瓦当貼り付け技法に変化していく。IV期(1300～1333年)では、金沢文庫遺跡で出

土した上向き剣頭文で中央近くに菊花文の押印された事例などが確認できるが、1315年以降衰退していく(山崎 2000)。鎌倉周辺地域でも、武蔵、常陸、上野、下野などで剣頭文軒平瓦が確認されている。地域ごとの特徴はあるものの、中世I期～III期においてみられ、概ね鎌倉と同じ変遷をたどる(山崎 2000)。

東北地方では、平泉中尊寺および柳之御所遺跡などで12世紀後半の事例が確認されている。陰刻技法で表現されており、上外区に珠文が施文されている。九州では、大宰府の安楽寺および観世音寺を中心に、12世紀から13世紀にかけて確認されている(図6)(栗原 1989)。剣頭文単独ではなく、珠文、文字文、巴文と併用して施文されており、折り曲げ技法および顎貼り付け技法で製作されている(山崎 2000)。

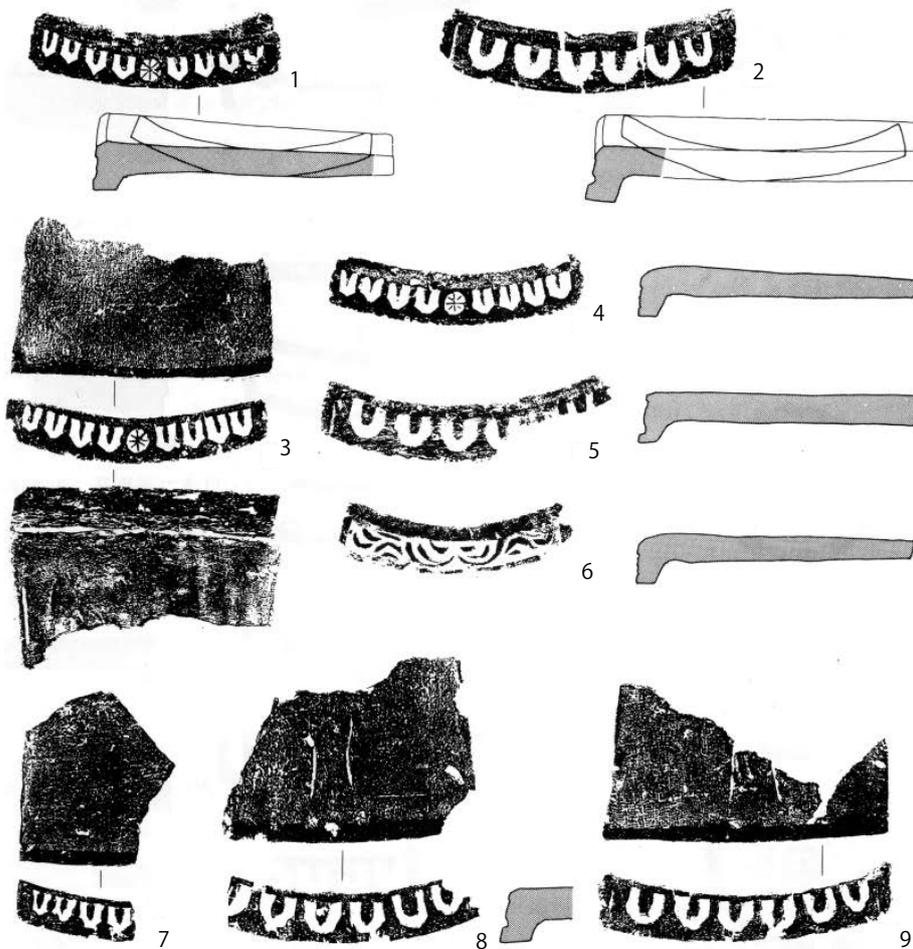
I 期



I 期

- 1 平安宮真言院
- 2~4 尊勝寺
- 5 円勝寺
- 6~8 京大医学部構内
- 9 六波羅密事

II 期

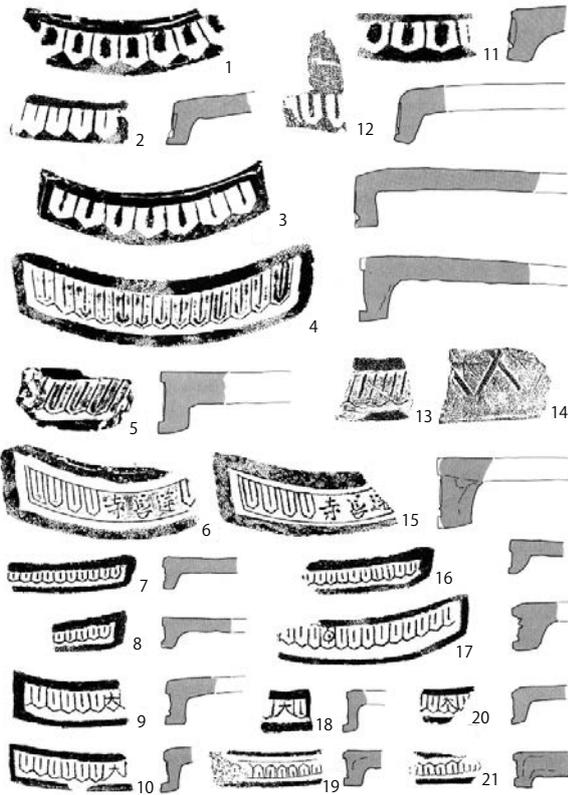


II 期

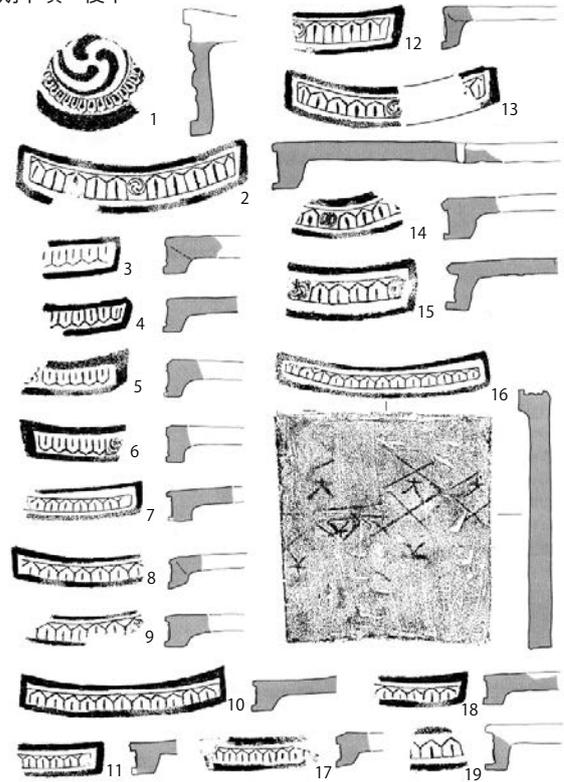
常磐仲ノ町集落遺跡出土

図4 京都出土の剣頭文軒平瓦 (S=1/5) (山崎 2000 より転載)

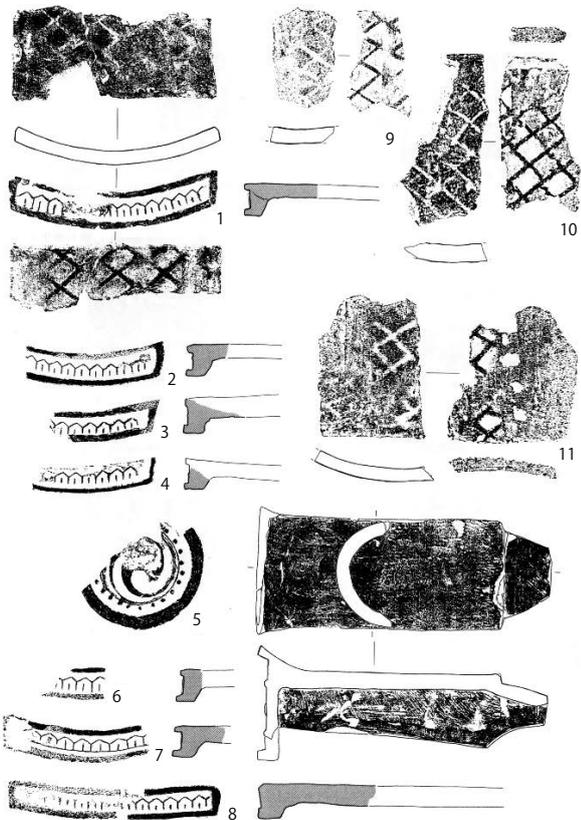
I期・II期・III期前半



III期中頃～後半



IV期



I期・II期・III期前半

1～3・11～12：I期 4～6・13～15：II期後半  
7・8・16：II期末 9・10・17～21：III期前半

1・2・10・11・12・18：鶴岡八幡宮 3～5：永福寺  
6・15：建長寺 7・8・16：称名寺  
9・17・19・21：鎌倉極楽寺 13・14：水殿瓦窯  
20：横浜国立大学附属小中学校

III期中頃～後半

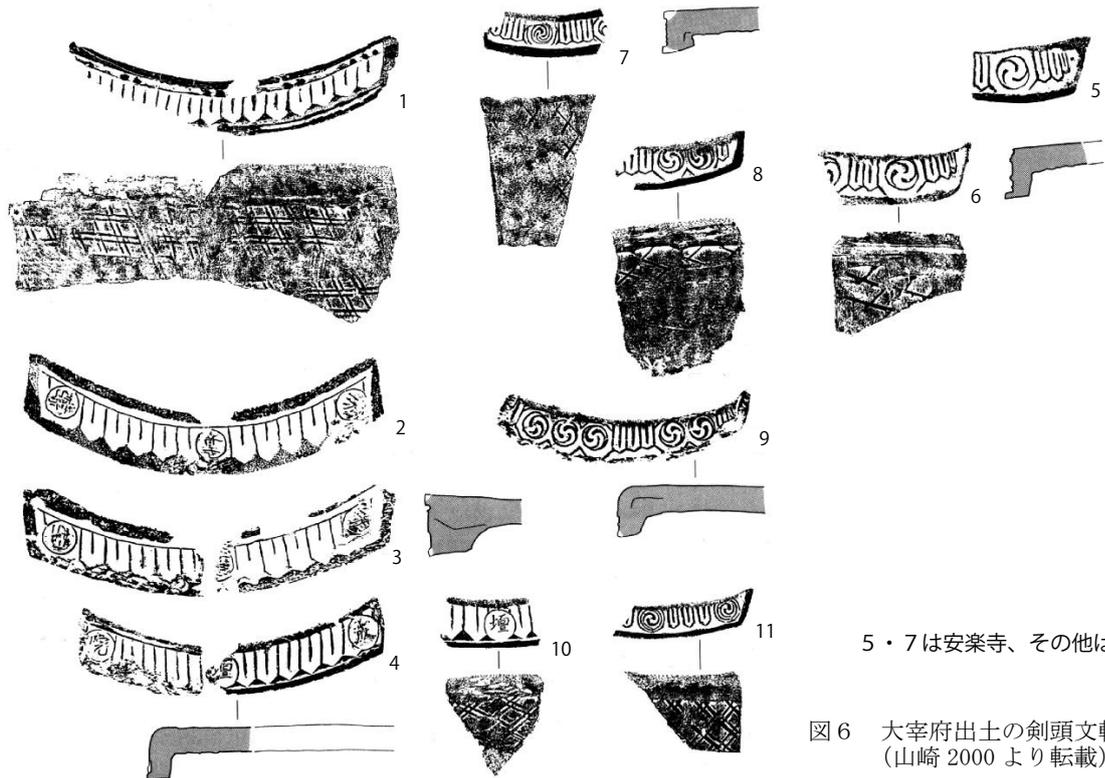
1～6・12～15：III期中頃 7～11・16～19：III期後半

1・2・9・13・19：永福寺 3・7・8・14～16：鎌倉極楽寺  
4：横浜国立大学附属小中学校 5・6・10・18：金沢文庫遺跡  
11・12・17：称名寺

IV期

1～4・9～11：金沢文庫遺跡 5～7：永福寺 8：鎌倉極楽寺

図5 鎌倉出土の剣頭文軒平瓦 (S=1/8) (山崎 2000 より転載)



5・7は安楽寺、その他は観世音寺

図6 大宰府出土の剣頭文軒平瓦 (S=1/6) (山崎 2000 より転載)

鎌倉

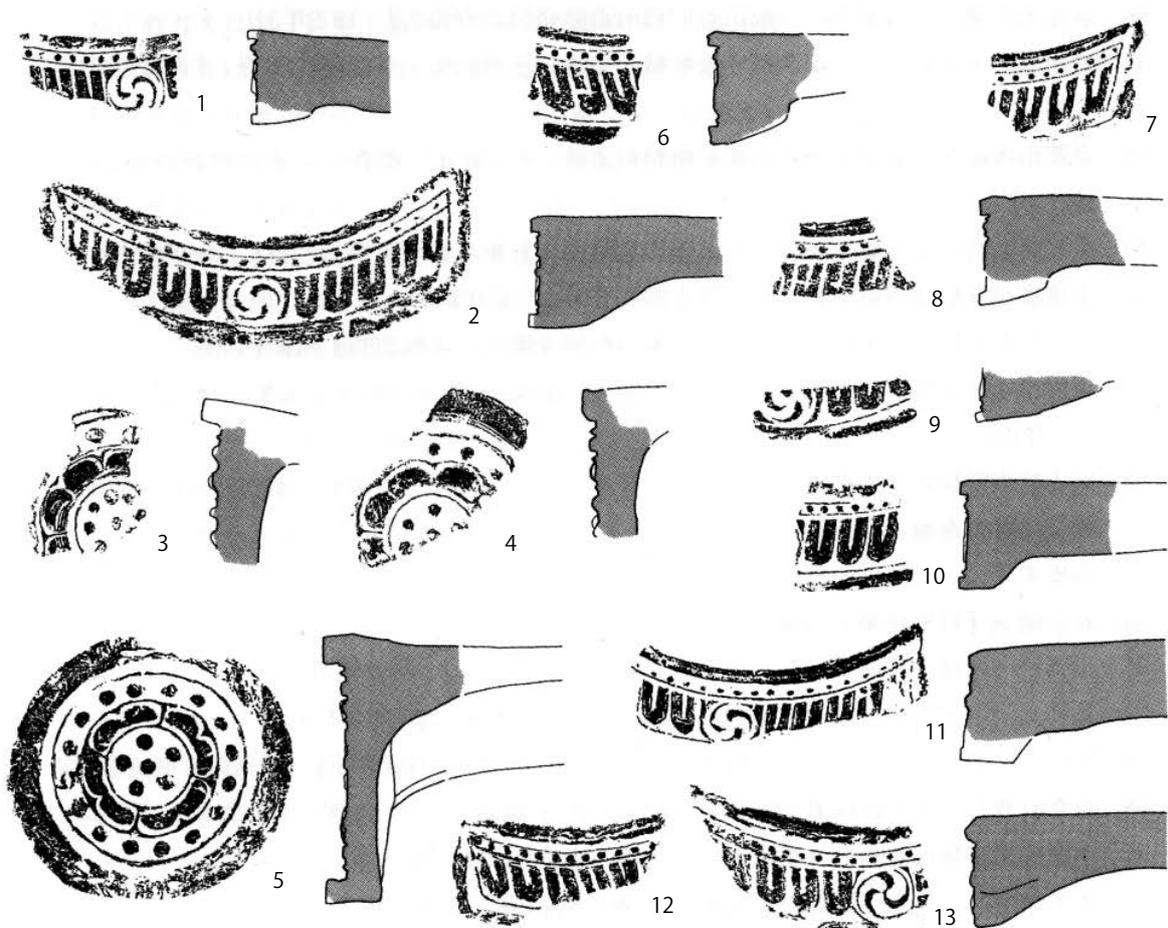
大宰府



1・2：称名寺 3・4：永福寺 5・6：鎌倉極楽寺

1・2：観世音寺 3～6・8：安楽寺 7：武蔵寺

図7 畿内以外の地域出土の剣頭文・巴文軒瓦 (S=1/6) (山崎 2000 より転載)



1・2・3・4・6・7・8・9：石清水八幡宮 5・12・13：大和薬師寺 10：平安京左京三条三坊十一町 11：久修園院

図8 畿内出土の劔頭文・巴文軒平瓦(S=1/4) (山崎 2000 より転載)

### (3) 劔頭文・巴文軒平瓦について

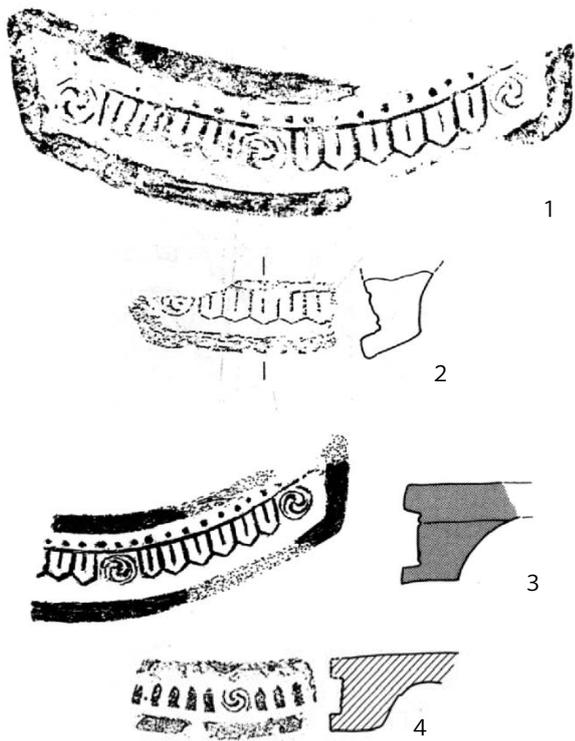
劔頭文・巴文軒平瓦の事例もまた、全国で確認できる。この組合せが最も多く確認できるのは鎌倉と大宰府である(図7)。鎌倉ではⅢ期中頃(1275～1287年)に、永福寺などで上向きの劔頭文と巴文が施文された事例が確認されている(山崎 2000)。大宰府では安楽寺および観世音寺を中心にみられるほか、幅広の劔頭文内に巴文が施文されているように見える軒平瓦(山崎氏は巴文軒平瓦と呼称)が確認できる。その他、平泉の柳之御所遺跡からも劔頭文・巴文軒平瓦が出土している(山崎 2000)。

畿内においては、星野猷二氏が石清水八幡宮境内で採取した資料がある(図8)。平安時代後期のものとみられ、2種類の范があることが確認されている。A種は上外区の珠文が密で、両端の劔頭文は他と同じ大きさであ

る。B種は上外区の珠文数がA種より少なく、両端の劔頭文が他より小さい。星野氏は、これらの瓦を大和産と考えていたが、酷似した文様の軒平瓦が1999年に薬師寺の調査で出土した。ただし、胎土が石清水八幡宮出土例と同一であるかどうか不明であり、また平安京内や大阪府枚方市楠葉の久修園院から同范の瓦が出土している。このことから、石清水八幡宮周辺に産地がある可能性も残されている(山崎 2000)。

このほか、橘寺から3点の劔頭文・巴文軒平瓦が出土したことが報告されている(図9-1～3)。いずれも陽刻技法で施文されており、中央と両端に巴文が施文され、その間を下向きの劔頭文で充填している。断面が確認できる事例からは、顎貼り付け技法で製作されたことが確認できる。

さらに、興福寺旧境内の発掘調査でも劔頭文・巴文軒



1～3：橘寺 4：興福寺旧境内  
 (1：石田 1936 2：榑考研 1999  
 3：山崎 2000 4：前園・関川 1978)

図9 大和地域出土の劔頭文・巴文軒平瓦 (S=1/4)

平瓦の破片が出土した(図9-4)。図面を見ると、簡略化された上向きの劔頭文が配され、中央に右巻き三巴紋が施されている。劔頭文の向きが上向きであることから、IV期(1300～1333年)の頃のものと考えられる。

#### IV. 瓦の検討

この章では、龍松院出土の劔頭文・巴文軒平瓦について、瓦そのものの検討と、前章で文様の構成が酷似していた他の遺跡出土の劔頭文・巴文軒平瓦との比較検討をとおして、龍松院出土軒平瓦の時期、製作地および成立経緯について考察する。

##### (1) 龍松院出土軒平瓦の製作時期について

先述したとおり、今回の発掘調査で出土した劔頭文・巴文軒平瓦は、瓦当文様が陽刻技法で施文されており、(写真1・4)顎貼り付け技法によって製作されている

(写真2・5)。表現技法が陰刻から陽刻に変化する時期は大和地域ではII期末、鎌倉ではII期後半である。また、薬師寺では同じ陽刻の298型式になり、顎貼り付け技法がよくみられるようになる。同じ層から出土した土器類の時期とも差異が無いこともあり、龍松院出土の劔頭文・巴文軒平瓦は山崎編年のII期末(1251～1260年)のいずれかに該当すると考えられる。

##### (2) 薬師寺出土劔頭文・巴文軒平瓦との比較検討

薬師寺からは、劔頭文・巴文軒平瓦が2点確認されている(山崎2000)。表現技法が陰刻であり、巴文が中央に1つしか無いなど細かな違いがあるが、左巻き三つ巴文であること、上外区しかなく、珠文が施文されていることなど、文様構成はほぼ一致している。

また、薬師寺出土の瓦は瓦当面にむけてほぼ段がなく、直線顎もしくはIII類の曲線顎であることから、平安時代後期(12世紀頃)とみられる(小池ほか1992、山崎2003)。胎土は白色砂粒を含んでおり、龍松院出土の劔頭文・巴文軒平瓦と共通している(写真7～10)。

また、巴文がない劔頭文軒平瓦のうち、298型式の瓦の中には、白色砂粒を含んでいるものがある。さらに、断面の観察から顎貼り付け技法で製作されていることも確認できた(写真11・12)。これらは、龍松院出土の劔頭文・巴文軒平瓦にもみられる特徴であり、同じ技法で製作されたと考えることができる。

以上の特徴から、龍松院で出土した劔頭文・巴文軒平瓦は、薬師寺出土の劔頭文軒平瓦の系譜に連なる可能性が考えられる。

##### (3) 橘寺出土劔頭文・巴文軒平瓦との比較検討

橘寺から出土した3点の劔頭文・巴文軒平瓦は、これまで確認してきた瓦の中で最も龍松院出土軒平瓦に瓦当文様が酷似している。また、橘寺出土の瓦のうち榑原考古学研究所で保管している1点(図9-2)と龍松院出土の瓦を検討した(写真13・14)。まず、断面を中心に観察した結果、白色砂粒および混和物の分量や大きさが同じことから、類似する胎土で製作されたと考えられる。また、橘寺出土の瓦の方が、外区が突出しており、幅も広い。その一方、龍松院の瓦にみられた凹型台の圧痕は、橘寺出土の瓦では確認できない。また、橘寺



写真1 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 瓦当面 (1)



写真2 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 断面 (1)



写真3 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 瓦当部裏面 (1)



写真4 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 瓦当面 (2)



写真5 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 断面 (2)



写真6 龍松院出土劔頭文・巴文軒平瓦 瓦当部裏面 (2)

出土の瓦では巴文に圈線がみられるなどの違いがある。以上の観察結果から、東大寺龍松院の劔頭文・巴文軒平瓦と橘寺出土のそれとは、龍松院出土のものが古く、橘寺出土のものが新しいとみられる。類似する胎土から同じ工房で製作された可能性もあるが、細かな文様や製作技法に違いがあり、断定できない。

上記のように、龍松院出土の瓦と橘寺出土の瓦は、大きな文様構成が共通するものの、一方で製作技法の相違が見られる。では、東大寺と橘寺との間にどのような関係性があるのだろうか。文献上の記録によれば、東大寺

と橘寺との直接の関係は奈良時代にしかない。善心尼が造東大寺司に經典の貸与を行った記述がみられ、橘寺と造東大寺司との間に関係のあることが窺える。一方で、承暦年間(1077～1081年)に橘寺が法隆寺の末寺から醍醐寺の末寺に移管された記録がある(奈良県立橿原考古学研究所1999)。また、過去の橘寺の調査では、東大寺および京都の栢社遺跡(史跡醍醐寺境内)などでも確認された、中世の唐草文軒平瓦が出土している(奈良国立文化財研究所1995)。

東大寺と醍醐寺とは、醍醐寺の開山である聖宝僧正が



写真7 薬師寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 瓦当面 (1)

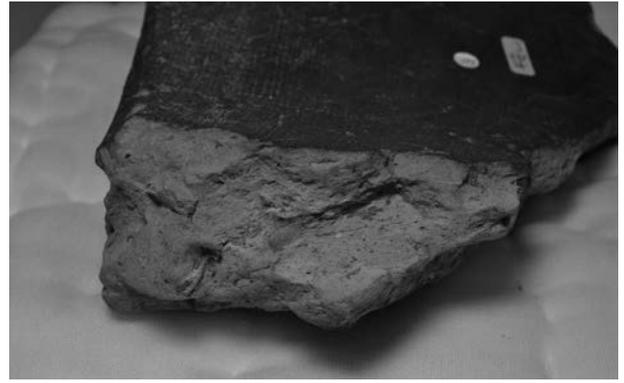


写真8 薬師寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 断面 (1)



写真9 薬師寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 瓦当面 (2)



写真10 薬師寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 断面 (2)



写真11 薬師寺出土 298 型式剣頭文・軒平瓦 瓦当面 (3)



写真12 薬師寺出土 298 型式剣頭文・軒平瓦 断面 (3)



写真13 橘寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 瓦当面



写真14 橘寺出土剣頭文・巴文軒平瓦 瓦当部裏面

東大寺東南院の住職であり、また東大寺の復興に大きく携わった重源上人が元々上醍醐の僧であるなど、強い結びつきを持っている（堀池 2004）。このことから、橘寺と東大寺もある程度の関係を持ち、同様の瓦当文様を共有する関係となった可能性が考えられる。

#### （4）龍松院出土軒平瓦の製作地について

龍松院出土剣頭文・巴文軒平瓦の瓦当文様の成立経緯については、大和地域内での成立の可能性が指摘できる。先述したとおり、龍松院出土の軒平瓦は薬師寺出土の陰刻剣頭文・巴文軒平瓦に関連するものと考えられることができる。ゆえに、星野氏および山崎氏の指摘どおり、石清水八幡宮および薬師寺の確認例が大和産であるならば、龍松院のものも大和産と考えることが可能であろう（山崎 2000）。また、薬師寺から出土した中世の瓦には、巴文軒平瓦も存在する（奈良国立文化財研究所 1987）。軒平瓦の瓦当文様として、剣頭文と巴文を採用しようとする下地は、大和地域内では薬師寺に関連する瓦窯で形成されたと考えられる。

一方、橘寺では鎌倉時代の瓦窯も確認されている（奈良県立橿原考古学研究所 1999）。橘寺出土の剣頭文・巴文軒平瓦と胎土が類似していることから、龍松院で出土した軒平瓦は、橘寺瓦窯で製作されたと考えることができるかもしれない。ただし、文様や製作技法の違いも確認できるため、断言することはできない。

大和地域の古代に剣頭文軒平瓦がみられないことから、剣頭文自体は他地域からの影響を受けて大和でも製作されるようになったと研究史では指摘がある（佐川 1995、山崎 2000）。当時最も剣頭文軒平瓦を製作したのは鎌倉であることから、山崎氏は鎌倉の影響を受けて京都や大和でも剣頭文軒平瓦が出現したとし、幕府の推挙を受けて後嵯峨天皇が即位したことが、何らかの影響を与えたのではないかと推測している。ただし、先述した薬師寺出土の剣頭文・巴文軒平瓦の存在から、それ以前に剣頭文が大和に流入していたことが明らかになった。一方、大宰府でも剣頭文・巴文軒平瓦が盛行し、剣頭文・文字文軒平瓦には東大寺の影響を受けたとされるものがある（山崎 2000）。以上の点から、剣頭文・巴文軒平瓦が九州の影響を受けて誕生した可能性も考えられる。ただし、本州と九州の瓦製作技法の変遷は一致せ

ず、時期的対応関係を考慮することは難しいという指摘もあり（山崎 2000）、断定することは難しい。

## V. おわりに

史跡東大寺旧境内第 184 次調査で出土した剣頭文・巴文軒平瓦について、大和および全国の事例との比較検討を通して、平安時代後期の薬師寺出土例および橘寺出土例と類似性があることを明らかにし、両寺院の関係性を指摘した。これまでの瓦の出土状況から、中世の大和地域で大きな影響力を保持していたのは興福寺であり、東大寺は対抗できなかったとした森郁夫氏の指摘がある（法隆寺編 2018）。しかしながら、今回龍松院から剣頭文・巴文軒平瓦が出土したことで、東大寺もまた、瓦生産において他の南都寺院と関係を持っていたことが明らかになった。

### 謝辞

本論考の執筆に当たり、薬師寺出土の軒平瓦の調査において、奈良文化財研究所の川畑純氏と田中龍一氏に格別のご高配を賜りました。また、奈良県立橿原考古学研究所の廣岡孝信、岡田雅彦両所員には、橘寺出土の軒平瓦との比較検討をはじめ、多くの御教示を賜りました。記して感謝します。最後に、本論考の執筆を許可いただいた東大寺塔頭龍松院の筒井英賢住職に心より感謝します。

### 参考・引用文献

- 石田茂作 1936『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会  
 上原真人 1978「古代末期における瓦精算体制の変革」『古代研究』13・14（財）元興寺文化財研究所  
 栗原和彦 1989「福岡平野における中世瓦磚の需要について」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会  
 小池伸彦・毛利光俊彦・山崎信二 1992「薬師寺宝積院の調査」『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所  
 佐川正敏 1995「鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦—」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版  
 中世瓦研究会編 2019『中世瓦の考古学』高志書院  
 奈良県教育委員会文化財保存課編 1995『重要文化財松尾寺本堂修理工事報告書』

- 奈良県立橿原考古学研究所 1999『橘寺』奈良県文化財調査  
報告書第80集
- 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』奈良国  
立文化財研究所学報第45冊
- 奈良国立文化財研究所 1995『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』  
25
- 藤元正太 2021「史跡東大寺旧境内第184次調査（龍松院）」  
『奈良県遺跡調査概報』2020年度（第一分冊）奈良県立  
橿原考古学研究所
- 法隆寺編 2018『法隆寺史 上 古代・中世』思文閣出版
- 堀池春峰著・東大寺史研究所編 2004『東大寺史へのいざない』  
昭和堂
- 前園実知雄・関川尚功 1976「法起寺境内発掘調査概報」『奈  
良県遺跡調査概報』1976年度 奈良県立橿原考古学研  
究所
- 前園実知雄・関川尚功 1978「奈良市興福寺旧境内発掘調査  
概報」『奈良県遺跡調査概報』1978年度 奈良県立橿原  
考古学研究所
- 森下恵介・立石堅志 1986「大和北部における中近世土器の  
様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育  
委員会
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報  
第59冊
- 山崎信二 2003「大和における平安時代の瓦生産（再論）」『古  
代瓦と横穴式石室の研究』同成社